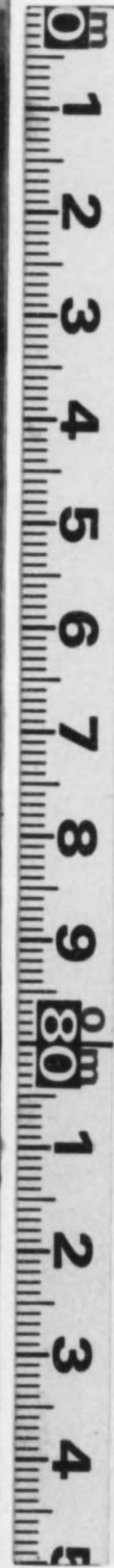


特245

634

素天述

弘法大師御遺作の愛讀者として



始



特 245
634

弘法大師御遺作の愛讀者として

大江 素 天



手奥今から七八年前と思ふ。私と同じ年輩の男が、伊太利のナポリに一泊してヴェス
ピアスの頂上に登り一分間、二分間と非常に正しい間をおいて、濛々と噴き上る噴
の状態を見て、大自然の持つすばらしい力の偉大さをツクツクと感心しました。ナポリ
の灣は、のつとりと紺碧の水をたへて脚下に美しい姿を見せてゐる——。更にその男

は彼のイヴセンを生んだノールウエーの、丁度嵐山の翠峽のやうな峽灣を汽車に乗り、
ベルゲンの街に出ました。この漁港ベルゲンの裏手の山、三百米の頂きに登つて、北海
の、冬になれば物凄く荒れるが、丁度その時は十一月、小波一つ立てゝゐない雄大な眺
望を縦にして、ノールウエーの青年達が、海の覇者として世界に活躍してゐるのは斯う



いふ海を持つてゐるからだと深く感ぜしめられたとでした。その男は、更にまた大西洋を横切つて、アメリカに渡り、例のナイアガラ瀑布、何億萬馬力の電力を出してゐる、漲り落ちる凄じい水の色を見て、こゝでも大自然の持つ偉大な力に胸を打たれた。

その男が、さういふやうな、珍らしい景色を世界の各國に見て、さて日本に歸つてから、その感激の旅の心持を筆にしよう、何か書いて見ようと、靜かに机に向つてから一考へさせられた。さういふことを書かうとする自分あまりにも詰らなく見られて來たのであります。といふのはヴェスピアス、ノースシー、ナイアガラ、さういふものは別にその男が行かなくても、誰が別にその立派さを讃へなくても、偉大な姿、素晴らしき姿は遠い昔から今の姿であつたのである。たゞ自分が始めて行つて、さうしてソコに感激が起つた、自分が始めて見て、無暗に感激したに過ぎない。私がこれからお話し申上げようとする弘法大師の御遺作、願文や經疏その他澤山の御著作は、千百何十年前から既に存在してゐたのである。始めてナポリを見、ベルゲンを見た男が無暗に感激した

やうに、私は最近弘法大師の御遺作を読んで、その偉大な、實に素晴らしい力に驚きました。が實は千百何年前から立派にあつたのであつて、たゞ自分がそれを知らなかつたに過ぎないのであります。皆様も、神社佛閣などにお詣りをされたり又景色のよい名所を見物された時に、必ず經驗されるやうに、始めてお詣りをした神社佛閣、始めて目にした景色、それが、たゞ自分のために存在し、自分だけを迎へて呉れたやうな感激を受けます。それも實は自分の無知、或は無經驗を告白するに過ぎぬともいへるのであります。弘法大師の御遺作を私がつと若い時から読んでをれば、もつと早くその立派さを知り、そして鈍才ながらも其悉くの内容をもモツと正しく知り得てゐる筈であります。然るにこの晩年まで私は弘法大師の立派な御遺作を殆んど知つてゐなかつたのであります。年取つた旅行家が只一度世界見物に廻つてびつくりしたやうに感激して、感想を書かうとすることは、金がなかつたか、暇がなかつたか、足不精であつたかを臆面もなく告白しようとするやうなもので、私が、今弘法大師の御遺作に就てお話し上げるのは

實は私の無知無識を告白すると同じで、御静聽を煩はすのは如何にも恐縮です。くどく申しますが、人間といふものは、小さい時から見なれてゐる山川草木に對しては新らしい感激が起らぬ。又自分達が常に接近してよく知つてゐる人に對しても、ほゞそれと同じやうなことがいへると思ひます。何とかで亭主それほど持てもせずなどいふ川柳がありますが、どんなに偉大な人物でも屢次これに接してをると、新らしい感激がさういづもかも湧いては來ない。その點から申せば、私がこの年まで、弘法大師の御遺作に親しむ機會がなく、今日始めて丹念にこれを拜讀するやうになつて、素晴らしい感激を受けて皆さまの前にその心持をお話するといふとは、寧ろ私にとつては幸福であるかも知れません。始めての旅から歸つた人は、聞き手が知つてゐるやうがゐるまいが、そんなことは少しも頓着しないで見物自慢を無暗としたがるものであります。私の御遺作に對するお話も無論その部類に屬するもので、殊に弘法大師にお仕へになつてゐられる方々にとつては御迷惑と存じますが、寛容をもつて御聽きを願ひます。

○
弘法大師の御生長になつた時代は、今と同じく、所謂國家の非常時でありました。

大師十一歳の時、すなはち延暦三年——桓武天皇が、六月十日に山城の長岡に都を遷されることになりました。この短日月に御遷都のことが實現したので、宮殿は畏れ多いことですが御十分ではあらせられなかつたこと、拜察いたします。この奈良から長岡へ都を遷されたのは、多年佛教が盛んになつて、僧侶が遂には國家の政治に干與し、その弊害の尠からぬ所から都を遷して人心の一新を圖られたもので、都を遷すといふ事は、重大なことであり、人心も不安になつて、丁度その翌年には造營使藤原種繼が遷都に反對した大伴種人に暗殺されてゐます、殊に當時は、天變地異が、毎日のやうに起つて暴風、地震その他いろ／＼の天災地變が頻發してゐますが、それでも遷都をなさらなければならぬほど『佛教と政治』關係の上に暗い雲がかゝつてゐたのであります。

桓武天皇は長岡に御遷都になりましたが、延暦十二年には、更に長岡から今の京都へ都をお遷しになることになりました。翌十三年、大師二十一歳の時には、新しい都が出来まして、十月廿二日にその新京にお遷りになりました。

弘法大師はかうした時代に、生れられ、生長され二十歳前後に、つくづくこの不安な世情を眺められました。それから後に支那へ行かれて、真言密教を齎らされたのでありますが、法のことばかりでなく、國の政治、其の他に就て色々憂慮された。それは丁度大師の時代が非常時であつたので、何としても國家をよくしなければならぬといふ御精神が幼年青年の時代から強く胸に込みこんでゐたからではないかとも考へるのであります。天性といふこともありますが凡そ人間二十歳前後に植ゑつけられた感化程、人間完成の上に偉大なる影響を及ぼすものはない。大師の御遺作を拜しまするに、國を憂へる國家を憂へる、國を思ふ、國家を思ふといふ思想をあまりにも多く見出されます。

昨年弘法大師一千百年の御遠忌に當つて、大阪朝日新聞社が弘法大師文化宣揚會を組

織し大師の遺徳を景仰し日本文化の向上に資することに努めました際、私終始その事務を執りまして、展覽會開催の時には、親しく大師の御眞筆、請來品、密教關係の曼荼羅佛像、佛畫、法具などを手にして、日夜命懸けでこれを御守りいたしました。それが機縁となりまして、それから一瀉千里の勢ひで御遺作を拜讀するやうになつたのであります。最初に旅人のお話をいたしましたやうに、大師が只私のために、私が今日始めて拜讀するものを千百何十年前に書き遺しておいて下さつたやうな新らしい感激を得てをるのであります。

本年はまた大楠公の六百年祭が行はれました。大阪朝日新聞社では公の誠忠を景仰するため大楠公展覽會を開催したのであります。私は直接に、大楠公時代に關係ある古文書その他二三百點のものを親しく手にして、つくづくと考へましたことは、千百何十年の昔、弘法大師が支那から歸られて、高雄山の神護寺に密教宣布の準備のため、約七年間在山されましたが、大師は、支那から密教を齎らされたそれをそのまま日本に弘通

しようとはされてゐない。奈良朝時代に支那から輸入された文化といふものは、たゞ支那の姿そのまゝを移植したに過ぎなかつた、それが奈良朝時代の文化でありましたが、弘法大師は、丁度明治維新以後外國からイヤといふ程流れこんだ所謂歐米の文化を極めて短日月の間に日本の固有文化の中に鎔かしこんでしまつたやうに、支那で學んで來られたことを、日本に歸られてから極めて短時日の間に、日本古來の文化、日本固有の精神の中へとかしこんだ、立派な、日本的の文化——佛教としてこれを宣布されてゐます。それでありますから大師の願文を見ましても、奉獻表を見ましても國家の安泰、寶祚の萬歲、皇室が榮えて、そして多くの人民がその幸福の中に生活すべきことを祈願してをられます。鎮護國家の思想、即ち日本精神——此の精神がズツと大楠公の時代に流れて武家の政治を斥けて天皇親政を御計畫になりました後醍醐天皇の聖業に、大楠公は純忠至誠、一家一族を擧げて奉仕し、名譽を願はず、位地や所領に望みをかけず、ひたすら忠節の完からんことをのみ希はれた高い精神につながつてゐます。弘法大師と、大楠公

との間には五百年の差があるが、其の間に日本精神、純忠至誠の魂はキレないでズツと繋がつてをります。神戸の湊川神社や河内の觀心寺、金剛寺などに於て今年は大盛んな大楠公六百年祭や、法要が行はれましたが、大楠公の七生報國——湊川において戦死されました時に弟の正秀ととも遺されました七生報國のお言葉、あの忠魂、それが國民の腦裏に蘇つて、明治維新となり、今日また、國家の非常時に、更に蘇つて、公の誠忠を景仰し、盛なお祭りをする——。私は弘法大師の御遺作を読んで大師の日本精神を知り、更に大楠公の御事蹟を知つて、世界に冠絶せる日本精神の多々ますく光りを放つ所以を知り、更に今日、この日本精神といふことが凡ての人によつて強調されることを思うて誠に難有く思うのであります。

○
これより御遺作について二三お話をいたします。最初に『文鏡祕府論』について申し上げます。弘法大師は「文鏡祕府論」といふ三卷の書物を著はされてをりますが

私は文筆に携はる身でありながら、これを讀む事の餘りにおそかつたことを深く恥ぢ、後悔いたしてをります。「文鏡秘府論」の始めに大師は『君子の時を濟ふ、文章是本也』といはれてゐます、これが書き出しであります。今日でも政黨が主義、綱領、宣言といふやうなものを發表する場合、文章に力を入れる。彼のアメリカの大統領の教書、あれでも政治が本體か、文章が本體か、といふほど力を入れて書いてゐる、我々から見ると文章を弄んでゐるのではないかと思ふほどうまく(面白く)書いてある。しかし文が一國の政治、文教の根幹基礎をなすものであることは申すまでもないことです『文は即ち教への源なり』詩を學び文を學ぶことは近くは父に事へ、遠くは君に事ふる所以で、それを學ばないものは、正に墻に面して立つが如し』と大師は喝破されてゐます。『しかしながら釋經妙にして入り難く、李篇玄にして和すること寡し』文を學ぶことはさう容易ではない。先賢が詩をつくり文を作るために著はされた書物は非常に澤山あつて『篋に溢れ、車に滿てり』車に積んでも積みきれぬほど澤山ある。そのため、貧しいものが、折

角志があつて詩や文を學ぼうとしても、とても寫し取ることができない『貧にして道を樂しむもの、望みを訪寫に絶つ』のみならず、餘りに多いからドレから手をつけてよいか、それを決めるだけでも大變である『童いぢけなくして學を好むもの、決を取るに由なし』……弘法大師は十五の時に遷都されたばかりの長岡の都に上り外舅阿刀大足の膝下にあつて經史百家の學問を修習されました。三十一歳、入唐されます時には既に支那語が十分話せる様になつてゐたらしい。此の點は平安朝佛教界の二大巨星の一方傳教大師と違ふところで、傳教大師は『漢音を學ばず』通譯をつれて入唐することを朝廷に願つてをられますが弘法大師は其必要がなかつた。大體弘法大師が入唐される時は二十年位長安の都にゐて學問修行をなさる豫定で行かれたのでありますが、行つて見ると二十年も學ぶ必要がなかつた。其ため大師はマル一年半ばかりで大同三年に歸られたのであるが、思ふに大師は二十年間留學のつもりで行かれたのでありますから、假令乏しかつたにしても、それだけの旅費は持つて行かれたに違ひない。ところが僅か一年半で御歸朝になつたので

ありますから、自然旅費も餘つたでせう、その金で私は御請來目錄にもあります通り澤山の經卷や、佛畫、佛像、法具の類を買ひ集めたり、寫させたり、書かせたり、作らせたりして船に満載して歸られたことゝ思ひます。歸られましたから、惠果和尚から承けつがれた眞言の第八祖として、これが宣布につきいろく考へを練つてをられて『禪黙に篤く』詩や文章の事に専ら力を盡されるといふことは出来ない状態にあつたのですが大師はこの暇のないお忙しい間に『余が癩瘵えがたく刀筆を事とす』後學の爲に『一多の後生』のために、この文鏡祕府論を書くことをお考へになりました。持ち歸られた澤山の詩文に關する卷物を比較研究されました。その結果『卷軸多しといへども要樞は則ち少し』大切な點はさう多くはない『名異に、義同じく、繁穢尤も甚し』いろく名義づけにはあるが、徒らに煩雜なばかりで、意義は大抵同じやうなものだと『その重複を削つてその單號を存し……卷軸を六合に配して不朽を兩曜にかけたり』緇素好事の人、山野文會の士、千里を尋ねずして蛇珠自ら得、旁搜に煩はされずして彫龍期すべし』この文

鏡祕府論を繕きさへすれば、なにも態々船にのつて命がけで荒海を渡つて支那へ行つたりしなくつてもよい、堂々たる詩を作り文を作る人になることができると、とても自信の強いことが、この祕府論の序文にしっかりと書いて結んであります。私は大師が卒直に自信の強さを、遠慮なく言つてゐられる所がたまらなくいゝと思ふのであります。

こゝで斯ういふことを申上げるのは如何かと思ひますが、新聞記者としての、私の經驗から申しますと、新聞や雑誌の『愛讀者』のもつ感情——愛着といふものは、まことに想像以上強いものでありまして、或は男女の戀愛關係以上——もつと強い、熱烈なものがありまして、一つの『信仰』になつてゐる、と思ふことが屢次あるのであります。私はこれらの『愛讀者』の心理と同じやうに、全く、弘法大師御遺作の『愛讀者』であることを皆さまに申上げておきたいのであります。再び繰り返して『愛讀者』であることを申し上げ、そして深い研究者でも何でもない、只盲目的な、熱烈な愛讀者であることを申し上げてよくその點を御諒解願つてをいて話を進めて行きたいと思ふのであります。それで、

正確に申しますれば、文鏡秘府論には、崔融であるとか、沈約であるとか、劉善經であるとか、その他澤山の人の原書を引用されてをりまして、それには一々明瞭に『某氏曰く』とか『或人曰く』とかチャンと断つてお出になりますけれども、私はさういふ學問上のことを系統的に、又は分解をいたしまして、研究をしようといふのではなく、誰の原書にあるものであらうと、誰のいつた言葉であらうと、一旦弘法大師の、透徹した明敏な頭の中をくゞつて、系體づけられた一個詩文の書となつてをります以上、凡てこれ大師の筆、大師の自ら叫んでをられる言葉として、隨喜感激の心持にひたりながら、これを愛讀いたしてをるのであります。

兎に角弘法大師は非常に立派な文章を書いてお出になります。美くしい對句をふんだんに驅使して、絢爛花の如き文章、それが餘りにも美し過ぎる、六朝風の、當時のそれが病弊であるといふ風に申す人もありますがその美くしい對句を思ふがまゝに躍らしてそして我々が原稿を書くよりも早く、非常な勢ひで書いてお出になります。それでどの

何れを見ましても、まことに華麗で、明朗で、生氣潑刺として、まさに萬花一時に開くの概があります。而も大師は詩を作り文章を作るに、他人のものをそのまゝ眞似をしてはならないといふことを誠めてお出になります、それはやがて『自分がかういふ文章を書いてゐるが決して他人のものを眞似してゐるのではないぞ』といふことを言外にいつてお出になるのだと思ひます『凡そ詩は唯だ古に敵するを以て上となし、古へを寫すを以て能となさず、意を衆人の先に立て詞を群才の表に放つ。或は全章を引き、或は一句を挿み、古人の二字三字を相黏するを以て力となすは麗玉を瓦石に廁へ、芳芷を敗蘭に殖うるもの、縦ひ善しといへども他人の眉目なり、己れが功にあらず、況して善からざるをや』つまり他人の名句を一つ二つ盗んで来てそれを自分の詩や文章の中へ挿んで見たところで、それは結局香ひのよい芷を根の腐つた蘭の上につぐやうなものだといはれるのです。かういふことは大師のやうな記憶力の強い、千卷萬卷の書を繕いて、直ちに自分の知識にしてしまはれる偉人にして始めて堂々といふことができる言葉であると思

ひます。しかし又大師は、初學者のためかういふことも教へてお出になります『凡そ詩を作るの人は皆自ら古人の詩語の精妙なところを抄録して隨身の卷子となし——始終身につけてゐて——以て苦思を防ぐべし、文を作るに興若し來らざれば即ち須らく隨身の卷子を見て以て興を發すべきなり』即ち、詩を作る人は今までに書かれた立派な處を寫しとつて、それを巻物にして、身につけ、詩興の浮んで來ない時には、それを繙いて自分の苦しい考を助けよ、と親切にいつてお出になる。學生たちにとつて全くよい參考になる。尙ほ學生諸君に爲になる事、試験勉強などする時にはどうすればよいか。それを大師は千百何十年前に、文章を作るに就ての心得の中に説てゐられます『凡そ文章に携はるものは、夜間床頭に明らかに一盞燈を置き、若し睡り來らば睡に任せよ、睡覺めば即ち起きよ、興發して意生ず、精神清爽にして了々明白なり』たとへこれが支那の學者の書いた語であるにしても、私は、恐らく大師の經驗から語られてゐることゝ信じたのであります。同じやうなことが祕府論の中にモ一度出てをります、讀んで見ます『凡

そ神安からざれば人をして暢びずして興なからしむ、興なくんば即ち睡りに任せよ、睡れば大いに神を養ふ、常に夜は燈を停めて自ら覺るに任すべし、強ひて起るを須ひず、強ひて起る時は昏迷して覽る所益なし、紙墨は常に身に隨ふべし、興來らば即ち錄せよ——このことは嘗て幸田露伴先生もいはれてをります、それから私も常に手帳を懐にしてをりますが一向詩興が湧かないので、手帳はいつも眞白けです——興來らば即ち錄せよ、若し筆紙なければ羈旅の間に意多く草々たり（いら／＼する）舟行の後即ち安眠すべし、眠足るの後まことに清景多し、江上懷ろに満ちて興を生ず』睡たいからといつて新聞記者ばかりは、睡つてゐては大事なニュースを飛ばしてしまひますから、いかに睡くとも睡られない時には睡られません、大師のかういふ言葉は平生白紙の手帖でなまけてゐて試験の間際になつて矢鱈にネジ鉢巻で徹夜で勉強をして、見事落第をするやうな人たちには轟々と思ひ當る教訓と思ひます。日出でゝ起き、日没して息む、井を鑿つて呑み、田を耕して食ふ、正に句也文章也といふ語があります。文を以て職とし、樂

しみとすると、せざるに拘らず、我々の生活を豊富にするためには、この氣持、この心がけが必要で、やがてこれが一家、一國の生活を、文化を進めて行く所以となり、即ち文の徳『文は教の源』といふことになるのだと思ひます。

又かういふことが論じられてをります、文章の病癖のことではありますが『凡そ文章はその本性に關かる(その人の性格による)識高く才劣れるものは理周くして文窒がる(理論的になつて伸々しない)才多くして識微なるものは句佳して味少し(輕薄な調子になる)是によつて知る、情に溺れて語を廢する時は則ち語朴にして情暗し(感情にのみ走つて語の品位、莊重、華麗といふやうなとを考へなければ、語に本當の情味がふくまれない)語を事とし、情を輕んずる時は則ち情闕けて語淡し(語の末葉にのみ捉はれてゐては感情の潤ひがなくて語そのものにも滋味がなくなる)』『凡そ文を屬するの人は常に須らく意を作すべし、心を天海の外に凝し、思ひを元氣の前に用ひ、巧みに言詞を運んで、精しく意魂を練れよ、作るところの詞句に古語を用ふることなかれ、今日に及んで

舊意を爛かし、他の舊語を改めて、頭を移して尾に換ふ、此の如き人は長く進まず、自性なきがために心を専らにすること能はず、思ひ苦しみ、見を致して成らず』換骨脱胎といふことも結局文章の士となる道でないことを喝破されてゐるのであります。『それ文章を作るには但だ多く意を立つ、左に穿ち右に穴ほり、心を苦しめ、智を竭さしむ、必ず須らく身を忘れて、拘束すべからず、思ひ若し來らざれば即ち須らく情の放になすべし、却つてこれを寬にして境を生ぜしめよ、而して後に境を以てこれを照すときは思ひ則ち便ち來る、來れば即ち文を作れ、如しそれ境思來らざる時は作るべからざるなり』かうもいつてをられます。また『それ文章の興作は先づ氣を動かす、氣、心に生じて、心に發し、耳に聞き、目に見て、紙に録す、意は須らく萬人の境に出で、古人を格下に望み、天海を方寸に攢む、詩人の心を用ふる當さに此においてす』ともあります『凡そ文を作らば必ず須らく古人及び當時の高手の意を用ふるところを見て、新奇の調あらばこれを學べ』このことは前にもお話をいたしました、隨身の卷子、矢張り同じ教訓と

ぞんじます。この詩や文を作るに、苦心慘憺するといふことは大師の信念であり、主張であり、随つて貴い御経験であると見えまして『或人曰く、詩は苦思することを要せず苦思するときは則ち天真を喪ふと、これ甚だ然らず。固に須らく慮おもひを險けん中に釋なき、奇を象外に採とり、飛動の句に狀どり、冥奥の思ひを寫す。それ希世の珠は必ず驪龍の頷より出たり、況んや幽に通じ、變を含むをや。但し章を成して以後、その易かたき貌かたちありて思うて得ざるがごときなるを貴ぶ』といつてお出になります。私は大師の書かれましたものを讀んで、一氣呵成、千言立ろに成つてゐるやうに思ふのでありますが、この語を見ますると苦心に苦心を重ねてその斧鉞のあとが分らぬやうなスラリとした文章ができ上つてゐるのだといふことが分りました。『それ詩の工は心に創まり情を以て地となし興を以て經となす』人心同じからず、文體各々異り、較べてこれをいへば博雅あり、清典あり、綺艶あり、宏壯あり、要約あり、切至あり——斯の六事は文章の通義なり、苟くもその宜しきにあらざれば之を失ふと遠し。博雅を失はゞ緩となり、清典を失はゞ輕と

なり綺艶の失は淫、宏壯の失は誕、要約の失は闕、切至の失は直となる』言々みな服膺翫味すべきであると思ひます『苟くも胸懷より出でずして便ち翰墨に上し假りに相聚め合して依るところなければ、事空しく混淆に至つて、辭終に隙碎を成す』私ども、かういふ感じを自ら懐くとはしばしばあります、慚愧に堪へない次第であります。『鬼神を感ぜしむること詩より近きはなし。先王これを以て夫婦を經し、孝敬を成し、人倫を厚くし、教化を美ほめ、風俗を移す。然れば即ち文章は邦國を經理し、幽遐を燭暢する所以なり』この信念があつてこそ文に獻身できるのであります。文章報國など、よく手輕ひかにいふ人ひとがありますが、決して手輕いものではありません。

まだいろ／＼と詩や文章上のことを八方から説かれてゐますが、とにかく詩作の書が日本において著はされたのは、この文鏡祕府論が最初でありまして、それだけでも、大師の文教上に貢獻されたことは大したものと思ひます。後日、あまりにこの祕府論ですらが繁雜であらうからと、弘仁十一年の夏に、これを抄約して『文筆眼心抄』といふの

をお出しになりました、その序文に『後生これを寫し、これを誦せば、豈唯身を立て名を成すのみならんや、誠に乃ち人傑國寶、芥を拾ふに異らず』といつてお出になります文章がよく書ければ忽ち出世のできる時代であつたにいたしましたも、餘程の抱負と自信をもつてお書きになつたものといふことが推察できる次第であります。

○
弘仁七年、大師が四十三歳のとき、嵯峨天皇さまが、主殿助布勢海といふのをお使として、五彩吳綾錦の縁の五尺の屏風四帖を高雄の山房にお持せになり、これに古今の詩人の秀句を書くやう勅命になりました。それができ上りまして、奉獻されました時の上表文に『空海元と觀牛の念に耽つて久しく返鵲の書を絶つ、夜すがら歎息す云云。空しく筆墨を費して忝く珍屏を汗す、一たびは悚き、一たびは懼れて心魂飛越す』と非常に恐懼されてをりますが、又一面非常に光榮を感ぜられました、渾身の力をいたして書きましたといふことがのべてあります。そしてこの上表にも、文鏡祕府論の中にありまし

たやうに『詩を作るものは古體を學ぶを以て妙となし、古詩を寫すを以て能となさず、書も亦古意に擬するを以て善しとなし、古跡に似たるを以て巧みとなさず、故に古へより、能書百家體別る』云云といふことが書かれてゐます、よほどこの點は大師が肝銘してお出になつたことゝ存じます。そして、この勅命を拜したについて『空海入唐、能書の先生たちについて略々その口訣は聞いて參りましたが、志す所別にあり(佛教)深くは意に留めてをりませんでした。今聖雷の震響によつて——勅命を拜して、甚だ恐懼に堪へませぬ』とのべ『君臣風化の道を上下の畫に含み、夫婦義貞の行ひを陰陽の點に藏めたり、客主揖讓し、弟昆友悌あり、三歳變化し、四序生殺す、尊卑愛敬し、大小次第あり隣里和平し、寰區肅恭す、これらの深義悉く寫字に縊めり』書には天地自然の理三綱五常の道が正しく含まれてゐるものでありますと、欣悅の情をもつて、謹嚴にのべてお出になるのであります。大師を當時の書道の三聖の一と申したのも宜なる哉と存じます。

更にまた梵字并に雜文を嵯峨天皇に奉獻されました時の上表文中に『帝道天に感ずる時は則ち祕録必ず顯はれ、皇風地を動かす時は則ち靈文聿に興る——明皇これによつて風を弘め、化を揚げ、蒼生これを仰いで而して往を知り、來を察す、戸庭を出でずして萬里月に對し、聖智に因らずして三歳數を窮む、古を稽へ、故きを温ね、我れより範を垂るゝこと書にあらずして何ぞや』と、帝徳の高くましますことを申しあげて、そしてやはり書の徳を説かれてゐます。今日貴重な古書文獻の検討がさかに行はれ、いろいろ研究が進められて行きますことは、全く皇恩のありがたきことゝ存する次第であります。

○

天長五年、弘法大師が五十五歳のときに京都に設けられました我國最初の私學校、一般のものに普通教育をしようといふ、彼の有名な綜藝種智院の式しきと序の中に、かういふことをお書きになつてをります『物の興廢は必ず人による、人の昇沈は道にあり、大海

は衆流によつて深きをいたし、大廈は群材の支持するところ——類多きものは竭きがたく、偶たぐひ寡きものは傾き易し、これは自然の道理である——いま願ふところは、地位ある貴族高僧の協力を得て、この事業を百世相繼がんことを思ふ——既に官の大學あり、霹靂の下、蚊響何の益かあらんと難する人あるも、大唐には坊々に閭塾を置いて普く童稚を教へ、縣々には郷學を開いて、廣く青衿（青年たち）を導く、この故に才子城に滿ち藝士國に盈てり——今わが京都にはたゞ一つの大學あつて閭塾なし、これがため貧賤の子弟、津しんを問はんとするも所なく、遠方の好事（好學の徒）往還するに疲れ多し——今この一院を建て、普く腫脹を濟はん、又善からずや』即ち國家の興隆は少數の貴族や高官や富者によつてのみ所期されるものではない、何としても民衆の力に俟たねばならぬ、それだのに京都に大學があるのみで、それは高位高官の弟子のみが學問をするところ、支那のやうに一般の子弟に學ばしめる學塾といふものがない、それでは國家の文化といふものが本當に進まない。餘計なことだ、雷ががうく鳴つてゐるのに蚊がないたとて

何になるかと難する人もあるがさうは思はぬ、だから寧ろ貴族高僧たちの賛助を得てこの一院を建てたい、といふのが全體の趣旨で、最後に、争ひを好まぬ大師は『又善からずや』といふ柔かい文章で結んでおいでになる。そして綜藝種智院の方則を四項目かならべられた中に『孔子も、人は懸弧にあらず、ぶら下つてゐる瓢のやうなものではないといひ、釋尊も、皆依食住といはれてゐる、その道を弘めようと思へば須らくその人に飯すべし、給料を與へなければならぬ。けれども自分は素より清貧でその資を辦することができぬ、國益利人に意のある士は涓塵をすてゝこの願ひを濟へ』先生といへども水ばかり吞んで教鞭はとれない、矢張り生活といふことを考慮してやらなければならぬといふのです。恐ろしいほど世態人情に通じてゐられる。去年あたりから地方農村が不況のため、學校の先生たちがのんきさうにしてゐるのは怪しからぬと、間違つた反感から給料を何ヶ月も支拂はない村があつたやうに、新聞にも度々出てゐましたが、よし拂ふにも拂へない經濟的の事情があるにいたしましたしても、大師さまがお聞きになればそれはい

けないとお仰やるだらうと思ひます。不幸にして綜藝種智院はあまり長く續かなかつたやうです、思ふに、大師の頭が進み過ぎてゐて、まだ時代がその念願を容れなかつたものと見えます。けれど一般民衆の教育に意を注がれた貴い事實は永遠に消え去ることがありません。私は史蹟調査會あたりの方々がその所在地を研究して、何か記念碑を建てたいと思ひます、大宮通と油小路の中間といふことは分つてゐるのですから何とかなることゝ信じます。

○ 願文と勸進のことについて少し申し上げたいと思ひます。近頃何百年記念、何十年記念といふ風の回顧事業が非常に多くなりまして、これは古へを偲ぶ、故人の遺徳を景仰する、まことに結構なとであります、その都度相當な寄附勸進が行はれます。果して何れもが都合よく行つてをりますかどうか。どうも私どもは不幸にして、或は幸かも知れませんが、寄附募集の趣意を印刷したのを見まして、寄附をしたくて堪らなくなるや

うな名文にはあまり接してをりません(笑聲)ところが弘法大師は實に立派な願文を書いて、そして寄附の勸進をしてお出になります、性靈集を繰つてごらんになれば、隨所にそれを發見することができます。承和元年八月『佛塔を造り奉る』についての勸進に『…然るに今工夫數多にして糧食給し難し、今思ふ、諸々の貴賤の四衆とこの功業を同じくせん(いつしよにこの仕事をやりませう)一塵大嶽を高くし、一滴廣海を深くす、心を同じくし、力を戮はすがこれを致す所以也、伏して乞ふ、諸々の檀越、各々一錢一粒の物を添へて、斯の功德を相濟へ、然らば則ち營むところの事業日ならずして成り、功德萬劫にして廣からん』これならまことに氣易く、そして隨喜の涙を流す心持で身分相應の喜捨がしたくなるでせう。聖武天皇さまが奈良の大佛の鑄造を御計畫になりました時の勸願文にも、矢張り、既にかういふことをお書きになつてをりますが――。

次は天長三年、大師五十三歳の時に、東寺の塔を建立するについて澤山の巨材を稻荷山から運搬する必要があり、その時の勸進に『空海等謬つて良匠に代つて叨りに御願に

預れり、日夕に驅馳して、東西に經營す、今塔幢の材木を近く東山に得たり、僧等今月十九日より夫と共に曳き運ぶ、木は大に、力は劣にして功を成さんこと太だ難し、蟻娘の車に對ひ、蚊虻の嶽を負はんが如し、一人の孝恩、百官の忠臣にあらざるよりは、何ぞ能く先聖の御願を莊嚴し、廣大の佛事を成就せん……』何といふ巧みな行文でせう、忽ち私たちはその曳綱を握りに行きたくなります。泣かすして泣き、慙へすして慙ふ、文の力の多々ますく、光りを放つことを思ふのであります。

高野山に鐘を鑄造された時には『今思ふ、四恩のために七尺の銅鐘を鑄造せんことを思ふ、然りといへども貧道清貧にして、志あつて力なし、伏して乞ふ、有縁の道俗、各々涓塵を添へて斯の願ひを濟へ、生々に如來の梵鐘を吐き、世々に衆生の苦聲を脱せん』同じやうな筆法ではありますが、生々に如來の梵鐘を吐き、世々に衆生の苦聲を脱せんといふところがこの願文の生命で、さうして鑄造されました梵鐘は千百年來、朝な夕な野山六十四の峯々に妙なる響きを傳へてゐるのであります。

弘法大師は非常に圓滿な性情を具足してお出になりましたから、人と争ひを敢てされたやうな事蹟は少しも傳はつてをりません。叡山の傳教大師が奈良の佛徒と盛に論争をやつてをられる時にも、少しも觸れてをられません。守敏僧都と神泉苑の祈雨に功名を争はれたやうなことが繪卷などに出てをりますけれども、それはあとから附會したもので、大師にして左様なことがあつたとは、何としても信ぜられません。また弘仁四年、四十歳の時に宮中において宗論を闘はされ、印を結び呪を唱へ、金色の大日如來の顯現を實證されて法相、三論、華嚴、俱舍、成實、律、天台の大徳たちが大師の前に慍伏されたといふやうなことが、これも繪卷に出てゐまして『清涼殿の八宗論』としてやかましいものでありますが、これとて大分怪奇的な事實をあとから附加されたもので、たとへ火花を散らして論争をされたにいたしましたもこれは宗論でありますから、喧嘩ではない、いはゆる君子の争ひ、法を護るための主張であります。しかしその年に傳教大師

から「理趣釋經」の借覽を求められて、これに返事を書いてお出になる、その文は珍らしく殺氣立つた、筆端火を吐くていの、恐ろしく強いものであります。非常に長く、且つお話しでは一寸分りにくい教理がのべてありますから、略しまして、少しばかり申して見ますが、最初に『貧道(私は)闇梨(あなた)と契ること積んで年歳あり(久しく交際を願つてゐた)常に思はく、膠漆の芳、松柏と與に凋まず、乳水の馥り、芝蘭と々もに香しからんと(そしてそれはいつまでも變らぬものと思つてゐた)……然りといへども、顯教一乘は公に非れば傳へず、祕密佛藏は唯だ我が誓ふところなり(顯教はあなたでなければ弘通されず、眞言密教は私の相承け相護るところ)彼此れ法を守つて談話に違あらず(お互にゆるくお話をする時間もなかつた)不謂の志、何れの日にか忘れん。封緘を開いて具さに理趣釋を覓むることを覺りぬ(お手紙を見て理趣釋經を借してくれといふことを知りました)然れども、疑ふらくは、理趣端多し、求むるところの理趣は何れの名を指すか(何を借してほしいといはれるのか)それ理趣の道、釋經の文、天も覆ふ

こと能はず、地も載すること能はず、塵刹の墨、河海の水も誰か敢てその一句一偈の義を盡すことを得んや（随分鋭い筆法だと思ひます）大士如空の心にあらざるよりは豈能く信解し受持せんや、余不敏なりといへども……』かういふ調子で、大師としてはどうも珍らしく強い言葉が用ひられてあると思ひます。この年以後、傳教大師と交遊の文書記録がないやうでありますから、或はこれ限り絶交されるやうな事になつたかも知れません。當時勢力のあつたこの二大傑僧——いろいろのことが考へられて參ります。でも弘法大師自らの高文の崇りと斷することはできないと存じます

○
皆さまにも時々御經驗と存じますが、私ども、よく、知人その他から保險であるとか、求職であるとか、いろいろ紹介を頼まれることがあります。その場合どうも困つたといふやうな顔をしやすいものであります。弘法大師は、誠に親切に、立派な文章で『爲人求官啓』をお書きになつてをります、かういはれると、全く、すてゝおけなくな

ります。大師の御遺作を輯めた『遍照發揮性靈集』の中に出てをります。先づ『巨きな石は重くして沈み、蚊や虻は短かい距離しか飛べない、けれども、その重い石も船を得れば深海を萬里に過ぎることができ、蚊虻も鳳凰の翼にくつついてをれば高天を九空に翔けるとができる。人間の運不運といふものは誠にその隔りが多い、遇ふと遇はざると何ぞそれ遠かなる哉』といふ書き出しで『某は累代重い役目を勤めて、仁恵あり、智慧もあり、文章もでき、立派な人物であるが、不幸にして時の變に逢ひ外蕃に左遷されました。農に非ず、桑に非ず、蚕食する者多く、商ならず賈ならず蠹費する者衆し——百姓の經驗がないから、田を耕すこともできず、桑を摘んで蚕を飼ふこともできず、商賣もやつた經驗もないから物の賣買もできず、徒食してゐます、先人の田園日々男女の口に消え考妣の舍宅年々に僮僕の腹に盡く——祖先傳來の田畑は自分たちや子供の口糊の料となり、亡き兩親の住居も下女下男の御飯に代つてしまひました。一兩の親眷千里の糧を給せず、四隣の知友誰か一朝の飢を濟はん——一二軒の遠い親類はあつても救助を

うける譯に行かず、殊に近所の知人に助けを乞ふこともできません。遂に妻妾は邊壤の塵となり、僕従は行路の人となる——とう／＼妻や侍女や下僕たちはルンペンになつてしまひました。自分の瘦せ細つた影を見てはいつそ死んでしまはうかと思ふがそれもならず、天に祈つて生きよう、何とかして生活の途を立てようと思つてもその方法がみつからぬ、涕は雨露と争ひて隕ち、形は木石と將んとして枯衰せり、幸にしてこれが若し召還されて再び都に入ることができますならば……云云』真に切々の情が巧みな文章でのべてあります。大師は只一人の爲にも、これだけ文章の妙味を盡し、これだけの至情をのべて訴へられた。その結果その就職希望が、かなつたかどうかは知らないが、我々はかういふ場合、できるだけの温情を以て接しなければならぬことを、つく／＼反省する次第であります、これも全く文の力、文の感化力であります。

○ 『古人は道を學んで利を謀らず、今人は書を読んで但だ名と財とにす』といつてゐら

れるのを、どこかで散見したやうに思ひますが、かういふことは、昔も今に渝^{かは}らなかつたものと見えます。考へなければなりません。

○ 弘法は筆を選ばずと申しますが、これは全く間違つた俗説でありまして、大師は人一倍筆を選んでおいでになります。嵯峨天皇に『劉廷芝集』四卷を書して奉獻になりました時も『山窟に好筆なきによつて、再三諮ひ索むるに問然として應へなし、弱翰を以て強ひて書す、意に勝はず、深く悚歎す』とあり。また春宮に狸毛筆を奉獻されました時も、上表に『良工は先づその刀を利くし、能書は必ず好筆を用ふ。刻鏤用に随つて刀を改め臨池字に逐つて筆を變ず、字に篆隸八分の異、眞行草篆の別あり、臨寫規を殊にして大小一に非ず、物に對し事に随ひその體衆多なり』と申してゐられます、これによつても筆を選ばれたことがよく分ります。

若し私どもに大師が著作になりました十住心論だとか、即身成佛義だとか、その他澤山の經疏論章を読みこなす力があれば、どれだけまだ大師の學力智力が偉大であり、信仰の力が強く厚いかを、十分知ることができませんが、私どものやうな門外漢にとりましては、非常な難事でありまして、とてもその門の入口だけでも覗くことにはできないだらうと存じます。しかし、只今まで飛び飛びにお話いたしました、文鏡秘府論性靈集、高野雜筆等は、分らぬところは、分らぬまゝに飛ばして行つて、分るところだけ讀んで行きましたも、それは面白いほど、名文の力に酔はされまして、巻をおくことを忘れるやうになります。そしていろいろ、私どもの日常生活に、朗らかな、正しい教へを受けます。皆さまも是非御遺作の愛讀者になつていただきたいと存じます。

最後に弘法大師と女性のことについて、少しばかりお話を申上げ、この甚だ貧しい講演を終りたいと存じます。好事のやうではありませんが、私は、御遺作や傳記繪卷などの

中から探し求めて見たのであります。當時の佛教界には相當男女間にいかゞと思はれるやうなことがあつたと見えまして『男僧が尼寺に入つてはいけない』とか、また『頃日俗輩の男女僧尼の院に入り講聽に託して屢次假忤あり、外勝因に似て、内淨業を汚す、自今男の尼寺に入り、女の僧寺に赴くを禁ず』といったやうな一般信者に對しての聖勅が出たりしてをります。弘法大師は、よくこの主旨を奉戴されまして、御遺誡の中にも『女人はこれ萬性の本、氏を弘め、門を繼ぐものなり、しかれども僧房の内に入れしむべからず、もし要言あつて諸家の使至らば、外戸に立つて、速かに返報してこれを歸らしめ、時剋を廻らすことなかれ』とありますやうに、人をも自らをも誠めてお出になります。しかし決して女性を賤めてお出にはなりません『女人はこれ萬性の本』としてその本性を貴んでゐられます。大師が十八歳の壯年時にお書きになつたと傳へられてゐる彼の有名な『髻髻指歸』(後に改めて三教指歸)の中に美人を拉し來つてその無常觀を説いてゐられるところがありますが、それを見ると『女の美』といふことについても十分の關

心を持つてゐられたことが分ります『媿娟たる蛾眉は霞を逐うて雪閣に飛び、的磔たる貝齒も露に添うて咸く牢落す、傾城の花眼は忽爾として綠苔の浮べる澤となり（巧みな比喻と思ひます）珠を垂れたる麗耳は倏然として松風の通へる壑となる、朱を施せる紅の臉も卒かに青蠅の蹋蹴となり、丹に染みたる赤き唇も化して烏鳥の哺穴となる、百の媚の巧みなる笑みも枯れ曝らせる骨の中には更に信すべきこと難し、千の嬌の妙なる態も、腐爛せる體の裏には誰か亦敢て進まん、峩々たる漆き髪は縦横して藪の上の流芥となり、織々たる素き手は沈倫して草中の腐敗と作る、馥郁たる蘭氣は八風に随つて以て飛び去れり……』

大師御一代の内に女性と親しく來往されました、遂に自らその女性の像まで彫られましたのは眞井御前、大師が五十五歳から五十八歳までの四年間であります。眞井御前が靈夢に感じ宮城を出で、攝津甲山に登り、月餘にして寺院を建立し佛に仕へられたのは天長五年三月、二十五歳の時であります、その年の十一月には大師を迎へて如意輪の

祕法を受けられました。その翌天長六年、再び大師を請じ受明灌頂を受けて信心を勵んでお出になります。その翌七年二月十八日には三度び大師を迎へて祕密の灌頂を受けられました、傳法の灌頂を有髪の女性に授けられたといふことは唐にも日本にも曾てなかつたところでありまして、これが最初と申すことでもあります。そして三月十八日に眞井御前は甲山の山中から櫻の大樹をみつけて來て、それを素材として、大師は眞井御前を等身大の如意輪觀音像にお刻みになりました（現に國寶として同山神呪寺の本尊たり）僅か三十三日間でこの彫像は成りましたが、その間、妃は『如意輪の呪を持して暫らくも斷たず日夜各々三千遍の禮拜をなせり』とあります、いかに信仰の力が厚かつたかを想像させられます。大師はそれから五月の初旬まで滞在してをられます。その翌天長八年、眞井御前の發願による諸殿が完成いたしましたので入佛供養を行はれることになつて、大師は京都の東寺から十月十八日四度目に參向せられ、盛大な供養を行ひ、その時妃は剃髮されて尼僧となり如意尼と呼ばれました。そして如意尼は、大師が高野山にお

いて承和二年御入定になります前一日、南方即ち高野山の方に向つて合掌されたまゝ遷化されてをります(元享釋書)これほど深く信仰上、妃は大師に歸依せられ大師も亦如意尼の上に慈眼を向けられてゐたのであります。

○
御静聽を煩はしましたことをお禮申上ます、これをもつて私の講演を終ることにいたします。(拍手)

以上は昭和十年六月十五日弘法大師降誕會に際し、大阪朝日新聞社計畫部長大江素天先生が京都専門學校講堂に於て獅子吼された講演の筆記であります。

昭和十年七月十五日印刷
昭和十年七月廿一日發行

不許
複製

著者

大江理三郎

發行者

松本隆寛
京都市下京區猪熊通八條上ル

印刷所

六大新報社印刷部
京都市下京區猪熊通八條上ル

發行所

京都市下京區猪熊通八條上ル
六大新報社

振替大阪七三八番
電話下三八一六番

終

